氏　名（本籍）	山田　知佐恵（岐阜県）
学 位 の 種 類	修 士（看護学）
学 位 記 番 号	修 士 第 55 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学 位 論 文 題 目	思春期における1型糖尿病患児の療養生活－男女差を中心に－

別紙様式３

論　文　内　容　要　旨

※整理番号	56	(ふりがな) 氏　　名	やまだ　ちさえ 山田　知佐恵
修士論文題目	思春期における１型糖尿病患児の療養生活　―男女差を中心に―		

【研究方法】

１型糖尿病患児が行っている療養行動の実際、患児自身の思いや状況、周囲の環境を記述し、その関係性を明らかにするために中学１年生から 19 歳までの１型糖尿病の男児６名、女児５名の合計 11 名の患児を対象に面接調査を実施した。調査対象者には、独自のインタビューガイドを用いたインタビューおよび、社会的スキルを測定する尺度「KISS－18」、独立意識を測定する尺度「独立意識尺度」に回答してもらった。インタビュー内容に関しては KJ 法を用いて、KISS－18、独立意識尺度に関しては SPSS ver.11.OJ を用いて分析した。

【結果】

インタビュー内容から、男児は「過去の経験」「糖尿病の知識」「糖尿病の報告」「周囲の認識」「ソーシャルサポート」「家族の姿勢」「療養行動」「普通の生活」「主体的な自己管理」「自己の中の糖尿病の存在」「自己評価」「身体の状態」「血糖コントロール」「未来への方向付け」の 14 の上位グループが、女児は男児より抽出された 14 の上位グループに「過食行動」を加えた 15 の上位グループが抽出された。中位グループは男児では 51 の意味グループが、女児では 59 の意味グループが抽出された。また、そのうち男女共通の意味グループは 29 あった。

また、社会的スキルは１型糖尿病に罹患していない高校生と比べ有意差は見られなかったものの、男児より女児のほうが有意に低かった。独立意識のうち独立性は男児において、親への依存性、反抗・内的混乱は女児において得点が高かった。しかし、有意差は見られなかった。また、社会的スキル、独立意識ともに血糖コントロールとの間に有意な関連は見られなかった。

【考察】

思春期１型糖尿病患児の療養生活は、糖尿病と診断されたときからはじまる。そして、患児たちは、周囲の人や周りの環境から影響を受けるなかで、さまざまな思いを持ち、療養行動を行い、変化するからだの状態を感じながら未来へ向かって毎日の生活を送っていた。男児と女児においては抽出された上位、中位グループの内容は一部異なっており、療養生活に違いが見られた。また、思春期１型糖尿病の男児では独立意識が強く、女児では親への依存度、自己内部の葛藤が強いという違いがみられ、男児より、女児のほうが社会的スキルの発達が未熟であった。したがって、性差を考慮した関わりが必要であると考えられた。

【総括】

思春期１型糖尿病患児の療養生活はさまざまな要因が複雑に絡み合ってすすんでいる。そこで患児が適切な療養生活を送れるよう家族、学校関係者、医療者が連携をとりながらサポートできるような体制を確立していく必要がある。また、その際には患児たちの個別性や性差を十分に考慮していく必要がある。特に女児においては、過食行動といった不適切な行動が見られる場合もある。発達段階や社会的スキルを適切に判断し、思いを聞く機会を持ちつつ、慎重に関わっていく必要がある。

（備考）１．研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。（1200 字程度）
２．※印の欄には記入しないこと。